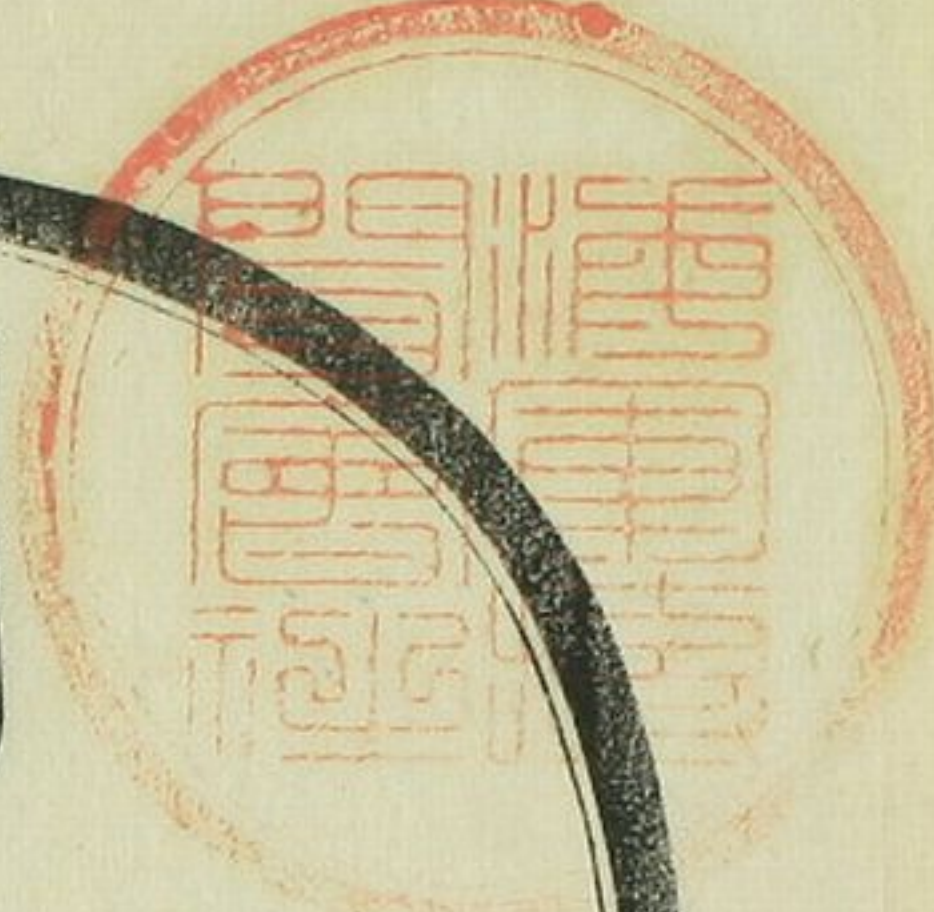


日二新聞

定價一匁

第十輯



西垣文
文庫10
7356
11



日新新聞第十一輯

慶應四年辰六月二日出板



○與州白石ふ於々列藩會議誓書

此度於與州白石列藩會議以公平正大之道遵奉朝廷撫恤生
民以欲維持皇國仍盟約如左

- 一 恃強侮弱或傍觀他危急者於有之者列藩可加譴責
- 一 構私營利漏泄機密離間同盟者於有之者可加譴責
- 一 妄入馬不顧細民艱苦者於有之者可加譴責
- 一 大吏件々列藩及衆議可備公平軍吏々裁會細微々節目
至りいふも不及衆議可隨大國々号令吏

一 殺戮無辜採集金穀類總々侵名分者於有々者速々可
處嚴刑吏

○
五月廿一日官軍武州の内より田無村へ着陣ありて尚夫
より青梅村へ出陣せんとせり折節斥候のもの飯能より
脱走兵飯能村へ潜伏のより二付廿二日拂曉官軍右村と立
出扇町屋村へ着陣廿三日同所出立佐々原勢先陣より扇
町屋村より五丁より進み此所を伏し井村といふ脱走兵
凡五十人斗り此村より潜伏し小銃にて打掛けより伏し
原勢怖る色より大炮二三発より掛し脱走兵大ひ

怖る発炮より止りより尚大炮より掛し脱走兵二人戦死し
他々残らば散乱せり夫より官軍より今ち鹿山中山飯能
へ進入り大炮小銃より脱走兵此地より逃去りれ
る又能念寺并他の二ヶ寺へ籠りより兵も官軍の大炮
より立ち終り大敗軍殺傷救多ありしより飯能村過半
焼失三ヶ寺即ち能念寺觀音寺智觀寺も焼失せり

○ 會津藩士へ誓書

一 今日の形勢より相至りいふ付より大義と明に闔國一
鑊九小相成天地神明へ誓ひ不尽死力より一韓と不
相成心義二付別紙の通一統より布告し

土津様以来御厚恩と奉蒙いつる忠報國々此時
可有之旨申渡

但右不就るは芝新御社へ参拜誓々奉報御國恩に
可有之旨

恭惟小癸丑甲寅以来夷虜航海して猖獗と恣に
湧目に益し月々甚しく終る人心乖戾するに至るを
原と尋む幕府失体より起る 天皇深く之を憂悶
るひ何とる公武の間一和せざるの勢あり幕府其罪と悟
る旧弊と除き尊奉の典と興る衆るを以て我公を以て
京師守護に任ずる然る京師の事情如何

敷慮如何と云ふは不知分と量り力を料し其任小勝ずん
るはわがれと敢て當りぬば衆論紛々として一定するは
昔幕府の内命に依る人と違ふ京師の状と探らし
め髣髴とす 敷慮の在る所と知りぬひ今此職を奉
ず輦轂の下と護り言ひ信用せざる時々公武
の間と和し徳川家の危急と救ふ此時小あり緞令任
勝すて身と失ふとも西上して京師を以て墳墓の地と定め
上へ 敷慮と安し奉り下へ万民と救へんと断然決心して
上京し其以来精忠と抽どるに依て 天皇より
依頼しぬひ大樹愛罷又厚し是とありて危難の旨或る

之ありとゞども必利運ハ搏ハ今ハ至ルまゝ六年の間誠忠
不渝終始如一 天皇敷感の餘り幾度とぬく 震しん翰はんと
下ハしゆり公曾ハ病ハまゝ時辱ハも自ら内侍所ハ
おわし祈願ハしゆふ至ル其寵遇ハ賓ハ無比類と云べし
今春も 先帝敷慮遵奉長く守護の職掌相ハ励ハその
功不少 敷感不斜ハしと褒賞のしめ参議御推任も
有ハ元来□□ハ先年より外ハ尊王攘夷ハ託ハしと實ハ
不軌の志とゞり 王室と誘ひ幕府と欺き其罪拔
挙ハまゝゞゞ甲子七月いづり終ハ大兵とあぢり
禁闕ハ下と驚ハひ銃九御所の屋牆ハ及ハふ至ル其逆乱

の罪誅ハて猶余りあり 天皇大ハ逆鱗ハ大樹又ハふ
こゝろ凶悪ハしゆふとゞゞ遂ハ寛典ハふとゞゞふ官位と
脱剥ハ領地と削ハ其命と用ハふ至ル其罪と声ハて
之と伐ハつ然ハふ 天皇崩御大樹薨去大表打ハつれ國家
多難の時とあひまゞゞ兵と解くハの所ハ其際ハ乗
し無勿体も 幼主の明とゞり奉ハ夏ハ託ハて□
の罪と赦ハ官位ハ復ハ 先帝の勅勘ハと蒙ハり
公卿とりちひ倍臣とゞり参与ハり攝政殿下と始め奉り
大樹我公衆名族ハ其職と免ハ正邪地と易ハ忠奸処と
換ハり至ル是 先帝の意ハ非ハざるのハるハゞゞ亦

今上の意ありあゝるい明白なり嗚呼一杯の土いも乾く
ざるふ 今上より父乃道を改めしむる大悪不道
のいふと謂ふべし其他和州乃一揆ハ英夷に降て其
カと頼り類其罪亦狂いび此上も幕府抑び我公に
汚名をかき兵を加へるんも豈不可知我公多年の
誠忠空しく水の泡となる残念といふも愚るべしや實に
膽と嘗薪し卧の時にし君辱しめらるる臣死す
るり期いさる苟人心あるも臣子の情いあや豈
片時も安す可んや 禁廷に對し奉りくちと引
る決しき為るるびといふも姦邪の徒若し

綸旨と矯く兵を加るまわし關東とちしを戮せ義兵
とあやう君側の姦邪と除くざるを得ず夫公乃忠誠貫
徹しびし今如此の勢し抑も尽ざる所あらし
畢竟公の意と裁任するり全しざる由る恐多きの
至しにあしびや然者闔藩乃四民貴賤上下とも祖宗
以来德澤に浴するとの面々此意を領掌しちしと合
せあふと一し兵起らるるや國家の敵と誅滅し武
威まはく天下にのちるんは期し日夜肝に銘し暫
時もくもくし國論一途に帰し万人の心一人のく
るい我公の精忠天地とけしぬき神明の擁護ありと

再ひ青天白日と仰くと豈疑あらんやあて身死を共
厲鬼や成る崇とあて一々賊と滅絶を乃心もきこのい
天地神祇其之と殛せよ

右の誓書ハ當春頃の由なりと此文他の新聞中ニ漏れ
ハ今爰ニ録し看官の見聞を補ふ人とい願くハ旧をもて答
玉ふと勿也

